

# 横断的授業を通じた学修による社会人基礎力育成に関する研究

山本淳子 横田正 根間健吉  
愛知学泉短期大学食物栄養学科

Study on cultivation of Fundamentals of social workers by learning through cross class

Atsuko Yamamoto Tadashi Yokota Kenkichi Nema

キーワード：社会人基礎力 Fundamentals of social workers, オムニバス授業 Omnibus lesson, 栄養士学外実習 Dietitian extramural training, アクティブラーニング Active learning, 三つの挑戦 Three of the challenge.

## Summary

In order to nurture and improve students' basic persons of social workers, we connected the fundamental / universal abilities acquired in the development of limitless potential (I) and the development of limitless potential (II).

While utilizing the results, it was linked to practical dietitian extramural training (including prior guidance and post guidance) and food material experiment.

And I worked on self-led active learning. In addition, in order to grasp the effect, we tried out behavioral assessment directly by the leader and an interview evaluation by the external career counselor with the cooperation of the dietitian campus training center.

As a result, it was reaffirmed that cross-cutting classes, tie-ups with external evaluators, and uninterrupted efforts are important for nurturing the fundamental skills of students.

## 要約

学生の社会人基礎力を育成・向上させるため、無限の可能性開発講座(I)で修得した基礎的・汎用能力を無限の可能性開発講座(II)へと接続し、その成果を活用しつつ栄養士学外実習(事前・事後指導を含む)、食品材料実験へと横断的に繋げ、自己主導型によるアクティブラーニングに取り組んだ。また、その効果を把握するため実習施設の協力を得て直接指導者による行動評価と外部キャリアカウンセラーによる面談評価を試行的に実施した。その結果、学生の社会人基礎力の育成には、横断的授業と外部評価者とのタイアップ並びに間断のない取り組みが重要であることが再認識された。

## I. 研究のデザイン及び取り組みの概要

### 1. 無限の可能性開発講座(I・II)における取り組み

無限の可能性開発講座(I)では、食物栄養学科1年生44名を対象に自己主導型(能動的)学修に取り組み、小グループ(5~6名で構成)による学修活動によって社会人基礎力について正しい理解と、12の能力要素を発揮するポイントなど、基本的な知識の修得を目標とし、「チームで働く

力」を育成するためグループワークを中心に活動した。そしてあらゆる社会活動の基礎となる人間関係作りのためのコミュニケーション力と、課題に取り組む力及びプレゼンテーションスキルの向上を目指した。無限の可能性開発講座(Ⅱ)では、紙芝居及び食育川柳を作成しプレゼンテーションを実施した。これは将来、栄養・食生活分野の専門職に就くことを前提に、食生活の改善を目的とした媒体を創作して、プレゼンテーションによりその成果を発信したものである。また、その発表までのグループワークでの「議論、まとめ、発表、評価」などの思考活動や「調査・資料収集」などの検索活動に取り組むことで、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」を育成し、こうした活動によって得た知見や行動力をバネとして、栄養士学外実習に向かう自分自身を形成することを目指すこととした。実施内容を以下に示す。

- (1) グループ活動に際しては「三つの挑戦(未知・不得意・得意への挑戦)」をスローガンに掲げ、クラス全体で確認するため活動内容を活動日誌に記録し、各グループからその日の行動目標に対する進捗状況や達成状況について報告させた。
- (2) 紙芝居を使用してのプレゼンテーションでは教員3名が審査にあたり、10項目から構成される「プレゼンテーション評価表」(表1)に基づいて的確な審査を行い、その結果を数値化して順位をつけた。また、学生はグループ単位で相互評価を行った。
- (3) 紙芝居及び食育川柳の作成基準は次のとおりとした。
  - ① 紙芝居は生活習慣病の予防・改善を目的とした栄養・食生活に関わる問題をテーマとし、対象集団を幼稚園・保育園児、小学校低学年または高学年、中学生、高校生、一般成人、高齢者など、具体的に設定しそれに見合った作品づくりを課題とした。
  - ② 紙芝居はグループ単位で行うこととし、発表時間を10分とした。発表後は審査員と発表内容に関連した質疑応答を行うこととし、この活動においてどのように社会人基礎力を発揮したのか、また、グループメンバーの優れた行動に対しどのように思ったのか、などについて具体的な行動例を掲げて質問に答えさせ、学生の社会人基礎力に対する理解度を確認した。発表時間には、審査員との質疑応答時間は含まれない。
  - ③ 制作の条件
    - ア. 紙芝居はA3サイズ15枚とし、その中の9枚は予めイラストが描かれた規定用紙(図1)を用いるが、この図画は意図的に余白部分を多くしてあり、このスペースに新たなイラストや文字を挿入しグループの独創性を発揮させることとした。
    - イ. イラストの1枚目にはタイトル、グループ名およびメンバーの氏名を記載し、2枚目から14枚目にグループの主張や結論を展開する。15枚目で要約する。
    - ウ. ストーリーの展開は「序論、本論、結論」の形式にまとめて、何が言いたいのか、重要なことは何か等、グループの主張を明確にする。
  - ④ 食育川柳の作成基準は次のとおりである。食生活、食事、料理、食行動の全般に関し、改善の啓発や動機付けとなるような内容を「五・七・五」の定型文にし、2編創作して1分程度で詠むこととした。きっかけとなった現象やねらいなどについてまとめる力を養い、聴衆の前で話す機会を経験することで発信力を高めるためである。
- (4) 活動計画および活動方法
  - ① グループのメンバーは4名で構成し11グループとした。各グループにおいてリーダー、サブリーダーおよび書記を決め自主的に活動することとした。
  - ② 配布教材・資料等は、紙芝居用カラー刷りイラスト9枚(図1)は規定とし、使用する順番は自由で何回使用してもよいが、9枚を使用することが必須条件である。その他にグループ活

動進捗状況報告書(毎回提出)、シナリオ原稿用紙(A4 罫線入り)等を配布した。

表1 プレゼンテーション評価表

プレゼンテーション評価表 (審査員、教職員用)

実施日 平成 28 年 12 月 22 日 (木)  
会場 5号館 551 教室

グループ (1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11 )

(メンバーの氏名)

次の各項目について番号に○印をつけてください。得点(配点)の目安は下記のとおり。  
「①F(不可)」 「②C(可)」 「③B(良)」 「④A(優)」 「⑤K(秀)」

1. 技能・表現(声の大きさ・スピード・表情・抑揚・間の取り方)  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
2. 態度・意欲・関心(立位姿勢・視線・服装・熱意・登壇・降壇)  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
3. チームワーク(協働作業)  
←全くない・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→十分にある
4. 内容は具体的で、なおかつストーリー性があったか。  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
5. これまでの学修成果は取り入れられていたか。  
←感じられない・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→十分感じられた
6. 知識や理解(科学的根拠に基づいて序論、本論、結論に構成されていたか。)  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
7. 技能・表現(イラストの場面に見合った適格な表現であったか。)  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
8. 創意・工夫(相手が理解しやすいような工夫や努力がされていたか。)  
←そう思わない・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→そう思う
9. 持ち時間を有効に利用したか(指定時間10分～15分)。  
←そう思わない・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→そう思う
10. 質疑応答の状況はどうであったか。  
←初級 ①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的

コメント欄(評価に当たられた先生の寸評など)

---



---



---

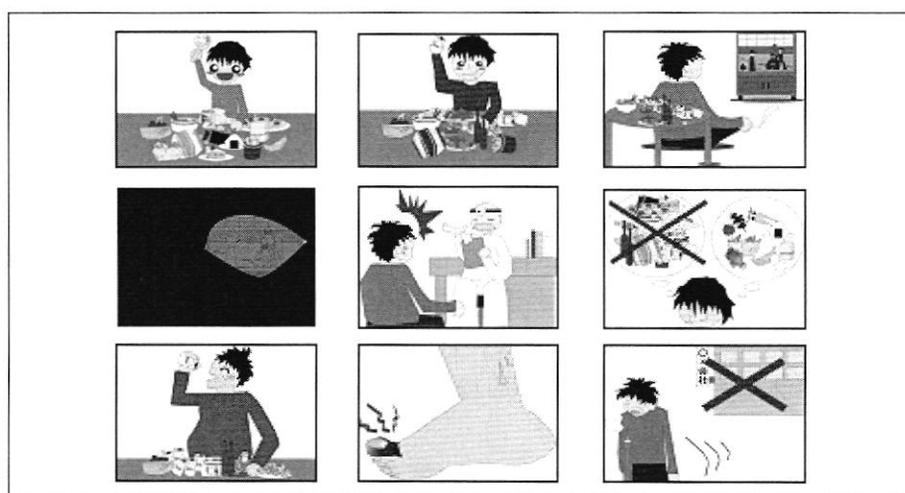


図1 紙芝居の規定イラスト

③ 紙芝居を用いたプレゼンテーションは、平成 28 年 12 月 22 日(木)の 1、2 限に本学 551 教室において実施した。11 グループが前半・後半に分かれて、その出来栄を競った。発表時間は 10 分で発表の順番はグループの代表者による抽選で決めた。総合司会は根間が、審査委員には横田、山本、伊藤が当たり評価表に基づいて審査を行い採点した(写真 1)。学生の相互評価も勘案して全チームの得点を点数化した(表 1)。発表の様子はビデオに収録し今後の教育活動に活用することとした。



写真1 審査員との質疑応答

## II. アクティブラーニングの技法と三つの挑戦への接続

### 1. アクティブラーニングの技法

アクティブラーニングとは、ここでは「読解、作文、討論、問題解決などの活動において分析、統合、評価のような思考課題を行う学修」であると定義<sup>i)</sup>する。具体的には、次の5つの要因(状態)がとられていることである。①学生は聞いているだけの状態よりも授業に関与している。②教員から学生への情報の伝達よりも、学生の能力開発を重視する。③学生は分析、統合、評価など、思考活動をしている。④学生は何らかの活動(読書、議論、作文など)をしている。⑤学生自身の態度や価値観に基づく検索活動の重要性が強調される。以上の5項目である。アクティブラーニングにおいては様々な教育方法が用いられているが、筆者らはザヤプラガサラザン<sup>ii)</sup>が整理した12の技法、すなわち、①コンセプトマップ②協調的執筆③ブレインストーミング④協調学修⑤自由記述(ミニットペーパー)⑥シナリオ(事例研究)⑦問題設定型学修(PBL)⑧チーム学修(TL)⑨事例設定型教授⑩パネルディスカッション⑪相互教授(教えることによって学ぶ)⑫ロールプレイ(演劇、シミュレーション)による教育方法に沿うこととし、今回は汎用化するため主として①、②、③、④、⑥、⑦、⑫の、7つの技法について本学の教育理念である「三つの挑戦」との接続を試みた。

### 2. 三つの挑戦

学校法人安城学園が教育の理念として定めたもので、①第一の挑戦(苦手への挑戦): 苦手なものを克服するための挑戦②第二の挑戦(上達への挑戦): 得意なものをさらに上達させるための挑戦③第三の挑戦(未知への挑戦): 未だ知らない自己に遭遇するための挑戦、である。これらの「三つの挑戦」とザヤプラガサラザンが提案した12の技法との接続を次の7項目に整理して、より具体的に研究活動の羅針盤とした。

(1) コンセプトマップ(概念を図で示すこと)⇔第三の挑戦(未知への挑戦)では、紙芝居の規定イラストに示された概念間のつながりを能動的に考え議論し、それぞれのイラストについて関連することを見つけ出しながら図に示すこと、いわゆる「コンセプトマップ」を作成するために「未知への挑戦」を実践する。

(2) 協働的執筆⇔第二の挑戦(上達への挑戦)では、グループメンバーで分担してストーリーを組み立て、シナリオ(発表原稿)を作成することであるが、グループメンバーの特定の人だけでは、この取り組みの意義がなくなることに留意しながら進めることが重要である。この行動が「上達への挑戦」となる。

(3) ブレインストーミング⇔第三の挑戦(未知への挑戦)では、他人の意見を批判的に受け入れないように留意しながら、活発な発言をとおして、できるだけ多くのアイデアを出しあい、様々

な意見を集約して紙芝居の展開に活かすための「未知への挑戦」である。

(4) 協調学修⇨第一の挑戦(苦手への挑戦)では、チーム学修であり、集団における他者との相互作用により、連帯感をもって分担作業をすすめる、チーム力を高めるためにグループメンバー相互に学びあうための「苦手への挑戦」となる。

(5) 事例研究⇨第二の挑戦(上達への挑戦)では、あらかじめ設定された規定課題について、グループディスカッションする。具体的な事例や状況に基づいて分析し、知識を活用してシナリオを作成することで「上達への挑戦」である。

(6) 問題設定型学修⇨第三の挑戦(未知への挑戦)では、紙芝居及び食育川柳の創作は必要な知識や技能がなければ展開できない課題であり、これまでの学修成果はもちろんのこと、これからの授業で知識や技能を獲得してプレゼンテーションに反映することである。特に栄養士として科学的根拠に立脚して課題に取り組む姿勢を養うための「未知への挑戦」である。

(7) ロールプレイング⇨第一の挑戦(苦手への挑戦)では、グループで作成した紙芝居のあらすじや組み立て及びシナリオに基づいてロールプレイング(演劇)をすることで、聴衆の理解や共感を高めることである。また、シミュレーションを反復することによって、失敗を恐れずに発信力を高め自信につなげていくことができる。これには「苦手への挑戦」が要求される。

### Ⅲ. 外部支援者との面談

#### 1. 気づきの会

無限の可能性開発講座の授業の一環として実施したものである。学生が外部支援者から将来の目標や学生生活の目的を考える支援と、意識や行動面の評価をとおして自己効力感を高めることを目的として実施した。すなわち面談をとおして自己の行動特性に気づき、また、さまざまな考え方や意見を理解することで柔軟性を養うためである。食物栄養学科1年生(平成28年度入学生)44名を対象に平成28年6月18日(土)及び11月19日(土)の2回、外部講師に森内真希氏、大橋麻衣氏、日向美穂氏を招聘して大学内(3号館の331~336教室)において、第1グループが9時30分から、第2グループが11時30分から、第3グループが14時からとし90分間、3名の外部講師ごとにA, B, C班に分かれて実施した(写真2)。学生はそれぞれ面談時間の15分前までに集合し、オリエンテーションの後4~5名のグループに分かれて各教室へ移動、終了後はアンケートを実施した。事前の取り組みとして、第1回では「短大生活で実現したいこと」、第2回では「これまでの短大生活を振り返って」及び「就職活動に向けたアクションプラン」と題したレポートを学生が記載し、担当する外部面談者へ送付した。



写真2 気づきの会

## 2. 外部面談者との意見交換会

気づきの会の効果確認と面談者からみた学生の目標設定、自己効力感の醸成及び就職活動に向けた意気込み等について確認し、面談の形式や方法について今後の方向性を模索するために外部面談者との意見交換会を行った。日時は平成28年11月19日(土)、午後4時から5時、第3会議室において実施した(写真3)。出席者は外部面談担当者の森内真希氏、大橋麻衣氏、日向美穂氏の3氏、本学から根間、横田、山本、久米、伊藤、古山の6名であった。議題は①前期と比較して成長したところ、②就職活動等学生をサポートするために教員が考慮すべき事項、③評価できる学生の取り組み、④面談中において気になった学生の発言と態度、⑤その他である。また、学生個人が特定されるような情報公開や議論を避けた。



写真3 外部面談者との意見交換会

## IV. 栄養士学外実習生の行動に関する評価・調査

### 1. 実習施設における評価・調査

栄養士学外実習の目的は、給食業務を行うために必要な給食サービス提供に関し、栄養士として具備すべき知識及び技能を習得することである。理論と実践業務との融合を図り、栄養士として望ましい職業観・勤労観及び職業に対する知識や技術を身に付けるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てることが目的である。このように栄養士学外実習においては、多くの社会人基礎力を発揮する場であることから、学内においてはグループワークによる能動的学修により、主体性や実行力などの「前に踏み出す力」、計画力や課題発見力などの「考え抜く力」、発信力や傾聴力、規律性などの「チームで働く力」を育成するための授業を展開した。こうした教育活動の学修成果を学生がどのように実践しているか、また、栄養指導の専門職を目指して学生は実習にどのように向き合い行動したのか。学生の行動を実習施設の指導者はどのように評価したのかについて把握するため表2に基づいて調査を実施した。

調査期間は平成29年2月20日(月)から平成29年3月31日(金)までで、栄養士学外実習を実施した学生全員(44名)を対象とした。調査期間別・実習分野別実習生の人数は表3のとおりである。最も多いのは事業所の25名、次いで児童福祉10名、老人福祉7名、病院2名となっている。調査の担当者は栄養士・管理栄養士、施設長または実習連絡責任者とし、実習期間中に教員が実習施設を訪問して評価・調査に関する趣旨を説明することで協力を得ることができた。調査項目は社会人基礎力12の能力要素の発揮状況として主体性、実行力、計画力、発信力、傾聴力、規律性に関する21項目について設問し各項目4段階で評価するよう依頼した。回答は郵送によることとし、平成29年4月10日(月)までに100%を回収した。

### 2. 学生の自己評価

2年次前期において、栄養士学外実習事後指導の授業時間を利用して、栄養士学外実習自己評価表により実施した。評価項目は実習先で実施した「学生の行動に関する評価・調査表」と同じ

内容とし、それぞれの結果が対比できるようにした。学生の自己評価と実習施設側の評価について相関関係を調べ、今後の学外実習指導及び関連事業に反映することとした。その結果は図3～6のとおりである。

表2 栄養士校外実習学生の行動に関する評価・調査表

栄養士校外実習学生の行動に関する評価・調査	
学生氏名 _____	
○回答は次の4段階をお願いします。( )に記号でお答えください。	
<b>A: 模範的である B: やや優れている C: やや劣る D: かなり劣る</b>	
1.	前に踏み出す力
(1) 主体性	
ア.	積極的に質問するなど、自分から指導を受ける姿勢がみられた ( )
イ.	作業中の安全、衛生確認に配慮していた ( )
ウ.	自分がすべきことは何かを考えて行動していた ( )
エ.	指示したこと以上の成果を出そうとする意欲があった ( )
(2) 実行力	
ア.	挨拶は自ら進んで励行していた ( )
イ.	器具類の取り扱いマニュアルや指導者の指示に基づいて実行できた ( )
ウ.	指示されたことに対し必ず達成するという意欲がみられた ( )
2.	考え抜く力
(1) 計画力	
ア.	調理・盛り付け・配膳などの時間に合わせ手順を考えて行動していた ( )
イ.	指導内容に沿って目標を達成するために時間管理ができていた ( )
(2) 課題発見力	
ア.	給食の運営に関し幅広く知識・技術を習得しようとする姿勢がみられた ( )
イ.	自分でできないことを発見し、問題を解決するために指導を求めていた ( )
3.	チームで働く力
(1) 発信力	
ア.	自分が聴きたいことをわかりやすく整理して質問していた ( )
イ.	声の大きさ、強弱、速さを意識して話ができている ( )
ウ.	実習内容の記録は適正で充実していた ( )
(2) 傾聴力	
ア.	指導者の話を聴くときに「あいづち」「うなづき」を入れていた ( )
イ.	指導内容でわからないことに対し質問し確認できていた ( )
ウ.	指導を受けるとき、指導者の顔を見て聴き、理解しようとする姿勢があった ( )
(3) 規律性	
ア.	時間や規則など決められたことを厳守できていた ( )
イ.	爪、頭髪、白衣など、身なりに対し、しっかり配慮していた ( )
ウ.	学生らしい実習態度や言葉遣いであった ( )
エ.	指導者に対する敬意が感じられた ( )

表3 実習期間別・実習分野別実習生の人数(単位:人)

実習期間/実習分野	事業所	児童福祉	老人福祉	病院	合計
H29年2月20日～2月24日	12	2	2	0	16
H29年2月27日～3月3日	5	4	4	0	13
H29年3月6日～3月10日	6	4	0	1	11
H29年3月20日～3月24日	0	0	1	0	1
H29年3月27日～3月31日	2	0	0	1	3
	25	10	7	2	44

## V. 食品材料実験と産学連携の取り組み

### 1. 目的

食物栄養学科では、社会人基礎力の育成のために1年次において、無限の可能性開発講座(I)および(II)を学び、2年次では栄養士学外実習および食品材料実験等の複数科目で小グループによる自己主導型の能動的学習法を実践し、社会人基礎力の向上を目指している。そこで、これらの実施により1年次での講座受講が、2年次の授業への取り組みや社会人基礎力の取り組み意識向上につながっているのかを検証することを目標とした。特に、産学連携を組み込みやすい「食

品材料実験」における取り組みと成果を明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

食品材料実験は前期と後期にわたって実施の科目である。前期には食品学、調理科学などで学んだ内容を基に、身近な食品を使って実験を行うほか、産学連携の取り組みとして、藤川まちづくり協議会と連携し「むらさき麦」のお菓子グランプリ開催の取り組みを行った。また、夏休みに授業の一環として、「愛知県漁業士交流会」を行った。これは、愛知県産の魚介類の普及啓発を目的に実施されており、愛知県産魚介類のさばき方を教えていただくものである。そこで、事前に魚介類についての学習発表の場をつくり漁業士の方々の前で発表を行った。後期には、藤川まちづくり協議会の依頼で「むらさき麦の料理教室」を実施するため、授業内で実習と官能評価を行い、むらさき麦についてさらに学ぶ内容とした。すべてグループワークで行うため、班員と協力し話し合う場も多い。また、外部の方々と接することで、地産地消など食育についても考え、食に関わる学生にとっても刺激になっている。これらの取り組みをとおり、どのような社会人基礎力が身についたのか、前期中間時と後期中間時に「社会人基礎力セルフチェックシート」により確認を行った。確認項目は、「食品材料実験」で必要と考えられる、前に踏み出す力から「主体性」「実行力」、考え抜く力から「課題発見力」「創造力」、チームで働く力から「発信力」「傾聴力」「規律性」とした。それぞれ1から10の内容が示されている。学生の社会人基礎力に対する意識がどのように変化したのかを比較検討した。

外部との取り組み日程を以下に示した。

(1)お菓子グランプリ：平成29年5月12日

(2)漁業士交流会：平成29年8月29日

(3)「むらさきかん」において地域住民を対象に地産地消をテーマとした料理教室を開催：平成29年11月11日

## 3. 結果

前期、後期の中間時に実施した「社会人基礎力セルフチェックシート」の結果を図2に示した。前期では、自己評価の高かった項目は「傾聴力」「規律性」であり、1から10の項目のうち半分以上は50%に達していた。「主体性」では「5 授業は欠席しなかった」、「10 指示がなくてもノートをとった」、の項目で70%以上の学生が主体的に取り組めたと判断していた。実行力においては、「7 提出物を期限までにやり遂げた」、「8 課題は必ず実行した」、が70%以上であった。また、「発信力」で70%以上だった学生は、「4 相手の目を見て話げた」、であった。しかし、「食品材料実験」において重要な、「考え抜く力」の「課題発見力」「創造力」を回答した学生は少なかった。このうちの項目で高かったのは、「課題発見力」では「4 現状把握し分析することができた」、が45%であった。「創造力」は、「6 疑問を持ちながら考えることができた」、で60%あったものの、他の項目は40%以下と少なかった。

食品材料実験では、実験を通して食品の変化を観察し、実験データから自分の考えをグループ内で話し合い、結果をまとめ考察し発表を行った。理解が不十分では発表してもポイントが明確にできない。そこで、発表する際は意見をまとめわかりやすく伝えることを意識させた。食品材料実験の結果を話し合い、積極的に教員に質問し発表につなげていた(写真4)。また、発表やレポート作成には、食品学、調理科学の知識が必要となった。しかし、前期「社会人基礎力セルフチェックシート」結果から、「考え抜く力」が不十分であることが分かった。発表は当番の時のみであり、他の班から積極的な質問などは出ていないことが原因と考えられた。また、レポート作成においても、言われた課題のみやっている学生が多いのが現状である。レポートを目的に沿

てまとめ、疑問点は調べ理解を深めることができている学生は少ない。そこで、後期では、前期の結果をふまえ実験中や発表、レポート作成においてより積極的に取り組むように伝え、教員側も実験目標をさらに明確に伝えるようにした。発表班の学生には、発表者以外の意識をあげるようにするため、発表者の「発信力」をより実践していくように指導した。

後期の「社会人基礎力セルフチェックシート」結果は、ほぼ前期と同様であるが、ほとんどの項目においてポイント数が上がっていた。特に、「課題発見力」の「7 どのような姿勢で取り組んだらよいかを考え行動した」、が50%近くとなった。さらに、「発信力」、「傾聴力」の回答数が高くなった。しかし、「傾聴力」のうち、「9 質問を工夫し相手の意見を引き出す」、「10 話す相手が自分の考えを整理できる聞き方ができた」、は回答数が前期からさらに減っていた。

外部との取り組みについては、(1)むらさき麦まつりでのお菓子グランプリへの参加に向けた取り組みでは、出品菓子のグループでの話し合い、出品菓子を定めるための試作・試食会を実施し、どの班も工夫されていた。嗜好評価を行い2チーム出場し、出場した10チーム中最優秀賞をとることができた。また、お菓子グランプリの企画・運営に携わり、藤川まちづくり協議会の方々と話し合いをとおり、お菓子グランプリを成功させた。これにより、発信力、傾聴力、規律性を発揮することができた。お菓子グランプリでのレシピ開発において、食品学・調理実習やライフステージ食事などの知識が役に立った。(2)漁業士交流会では、魚に関する学習発表をグループごとに行った。課題テーマをグループで協力し、パワーポイントを使い漁業士の前で発表することができた。その後、漁業士から魚介類の料理講習を受けた際も、学生は漁業士から積極的に魚のさばき方を学び、質問し会話も弾んでいた。実験レポートには、多くの学生が魚の認識を新たにし、今後につながったと記していた。(3)むらさき麦料理教室については、授業で料理配合の検討を行った。グループごとに使用材料の配合割合を変えて作り、官能評価を行った。学生は積極的に取り組み、料理教室に向けたレシピを完成させることができた。また、料理教室への参加学生6名は、自主的に決定することができた。

#### 4. 考察

2年次での「食品材料実験」は、産学連携の取り組みをあわせたことで、学生の社会人基礎力向上につながっていると考えられた。特に、「発信力」、「傾聴力」や「規律性」につながっており、人に伝えることの重要性が認識でき、将来栄養士として働く際の実践力となると考えられた。このように、社会人基礎力が身につけてきているが、さまざまな壁にぶつかったときなどに対応できる能力「考え抜く力」が低いことが明確となった。後期の評価結果が上がったことから、教員側の取り組む姿勢によっても、学生の意識向上につながると考えられた。しかし、発表はできていても、質問や意見が出ていないこと、課題はやり遂げられているが、さらに追及する意欲が少ないなど、より実践力をつけることが今後の課題である。今後は、発表時に学生から質問や意見が積極的に出せる雰囲気作りが必要と考えられた。また、考え行動できる力が付くように外部との取り組みを継続していきたいと考えている。

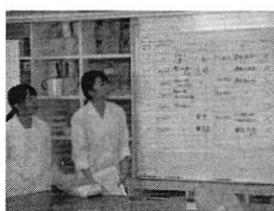


写真4 食品材料実験授業風景

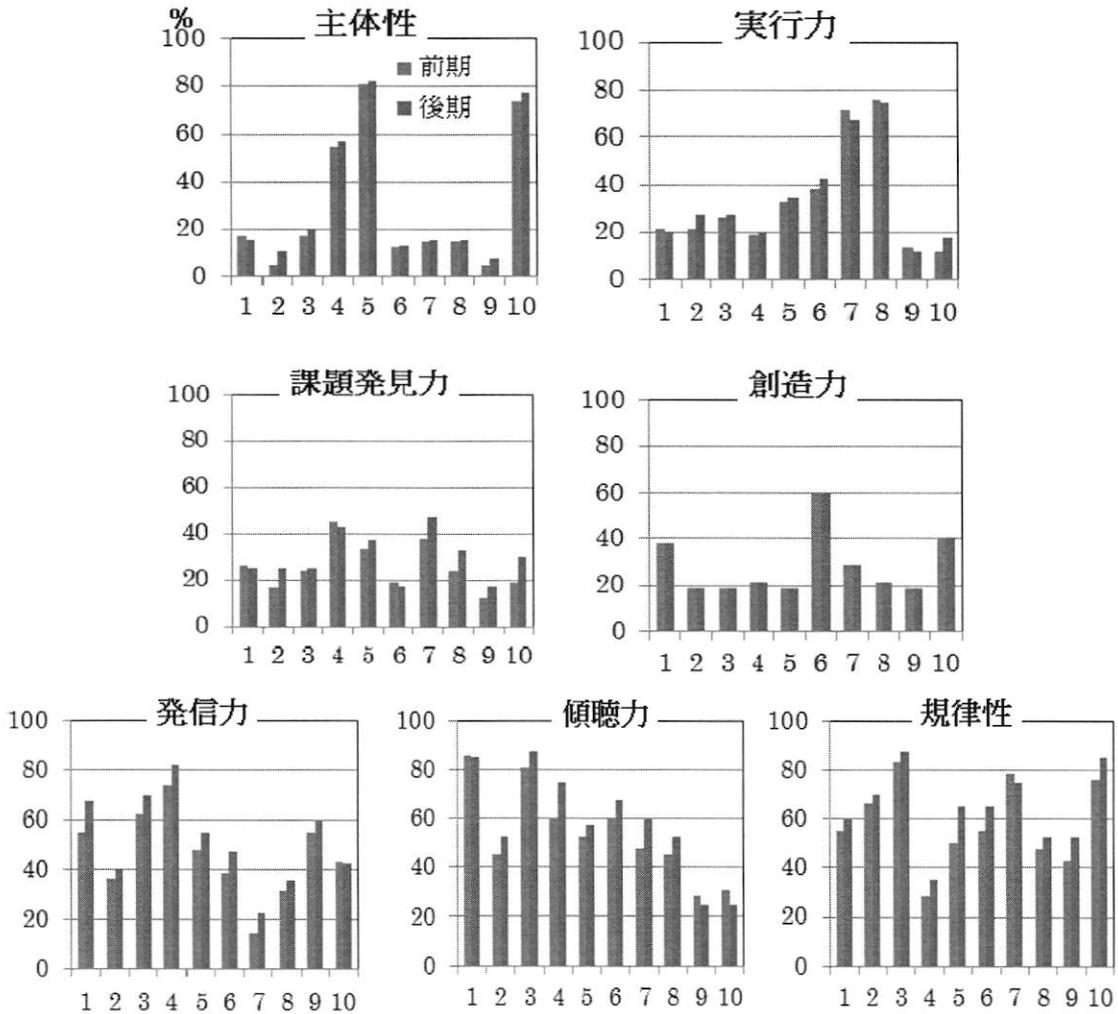


図2 前・後期「社会人基礎力セルフチェックシート」結果

## VI. 結果の概要

### 1. 無限の可能性開発講座Ⅱについて

食育をテーマに4名のグループに分かれて紙芝居の制作が行われた。第14週と15週の授業で制作した紙芝居の発表会が開催され、発表後教員からの質疑応答に入る前のタイミングで、司会者が「あなたがこの授業を通して自身に身に付いたと考える能力は何ですか？」と問いかけた。最も身に付いた能力要素名とそう考える理由の2点について、一人ずつ順番に発表した(写真5)。この問いかけに対する発表は、全ての学生が原稿を見ずに発表できたことから不得意分野へ挑戦する姿勢が確認され、表4に示した。最も多かった発表は発信力と傾聴力でそれぞれ14名(28.0%)、次いで主体性と状況把握力がそれぞれ6名(12.0%)、計画力3名(6.0%)、創造力2名(4.0%)、働きかけ力1名(2.0%)の順であった。実行力と課題発見力、柔軟性、規律性、ストレスコントロール力はゼロであった。また、1名が3つの要素を、4名が2つの要素を答えた。注目したいのは12の要素に該当しない協調性3名(6.0%)、発想力1名(2.0%)を掲げた学生が見られたことである。学生は、自身の行動を具体的に振り返り、社会人基礎力の能力要素を使って成果を述べてい

た。その時の状況から、どういう考えで行動したかまで振り返り、社会人基礎力の能力要素と結びつけて整理する深い内省が行われていたことから、学生の成長が感じられた。さらに、一部の学生は、振り返りに加え今後の課題や目標を付け加えて発表していた。これは、単なる振り返りで終えず、さらなる成長に向けて『主体性』が発揮された行動であり、「得意への挑戦」、「不得意への挑戦」の表れと評価できる。反面、授業で重点的に説明していない能力（「計画力」「創造力」「働きかけ力」）を身に付いた能力として挙げている学生がいた（6名）ことは注視すべき点と考える。『無限の可能性開発講座Ⅰ・Ⅱ』では、「主体性」を最重要とし「発信力」「傾聴力」を中心に「課題発見力」や「状況把握力」「柔軟性」の6つの能力要素を主に取り上げ、この6つの能力要素以外のものは、若干の説明をするに留めた。12全ての能力要素を均等に取り上げて、身に付けることは時間的に難しいため、仕事で必要となる重要度、優先度を考慮した為である。重点的に説明していない能力を身に付いた能力として挙げた学生の発表内容を考察すると、重点以外の能力まで理解・発揮できているというより、重点の能力要素について十分に伝わっていないと考えられた。前述の社会人基礎力に無い能力要素を掲げる学生が居たことから、まず重点の項目を理解させることは改善すべき点である。

表4 身についた社会人基礎力(3つの能力/12の要素)

前に踏み出す力 Action	主体性 6名(12.0%)	働きかけ力 1名(2.0%)	実行力 0名
考え抜く力 Thinking	課題発見力 0名	計画力 3名(6.0%)	創造力 2名(4.0%)
チームで働く力 Teamwork	発信力 14名(28.0%)	傾聴力 14名(28.0%)	柔軟性 0名
	状況把握力 6名(12.0%)	規律性 0名	ストレスコントロール力 0名

注)1名が3つの要素を、4名が2つの要素を答えた。また、12の要素以外に協調性3名(6.0%)、発想力1名(2.0%)

## 2. プレゼンテーションについて

プレゼンテーションの日程を表5に示した。審査は3名の審査員が「無限の可能性開発講座Ⅱプレゼンテーション評価表」(表6)を用い、10項目についてそれぞれ5段階評価され合計得点が200点満点で、紙芝居などの発表(写真5)が審査された。



写真5 プレゼンテーション(左:紙芝居 右:食育川柳)

表5 発表スケジュールと各班のタイトル及び対象者

発表順	発表時間	班	タイトル	対象者
1	9:30～9:42	6班	佐藤大好30歳の偏った食生活	大人向け
2	9:45～9:57	11班	太郎君の人生	大人向け
3	10:00～10:12	3班	天使のおつげ ～二度あることは三度ある～	幼児～小学生
4	10:15～10:27	7班	てっちゃん やばいよ やばいよ	小学生(低学年)
5	10:30～10:42	1班	しょうたくんとりょうたくん～地味にすごい！～	中学生向け
6	10:52～11:04	9班	こんな人生いやだ	大人向け
7	11:05～11:17	5班	我慢は嫌だが役に立つ	大人向け
8	11:20～11:32	8班	太郎くんのキケンな食生活	大人向け
9	11:35～11:47	10班	来る、きつと来る…	大人向け
10	11:50～12:02	2班	どうした？イチローくん	大人向け
11	12:05～12:17	4班	お父さんといっしょ	小学生(高学年)

表6 プレゼンテーション評価表(審査員、教職員用)

実施日 平成28年12月22日(木)  
会場 5号館551教室

グループ(1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11)  
(メンバーの氏名)

---

次の各項目について番号に○印をつけてください。得点(配点)の目安は下記のとおり。  
「①F(不可)」 「②C(可)」 「③B(良)」 「④A(優)」 「⑤K(秀)」

- 技能・表現(声の大きさ・スピード・表情・抑揚、間の取り方)  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
- 態度・意欲・関心(立位姿勢、視線、服装、熱意、登壇・降壇)  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
- チームワーク(協働作業)  
←全くない・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→十分にある
- 内容は具体的で、なおかつストーリー性があったか。  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
- これまでの学修成果は取り入れられていたか。  
←感じられない・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→十分感じられた
- 知識や理解(科学的根拠に基づいて序論、本論、結論に構成されていたか。)  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
- 技能・表現(イラストの場面に見合った適格な表現であったか。)  
←初級・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的
- 創意・工夫(相手が理解しやすいような工夫や努力がされていたか。)  
←そう思わない・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→そう思う
- 持ち時間を有効に利用したか(指定時間10分～15分)。  
←そう思わない・・・①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→そう思う
- 質疑応答の状況はどうであったか。  
←初級 ①・・・②・・・③・・・④・・・⑤・・・→模範的

コメント欄(評価に当たられた先生の寸評など)

---



---



---



---

表7 各班の得点と順位及びGPAの平均値

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	11位
班	3班	11班	6班	1班	5班	4班	2班	7班	10班	8班	9班
得点	157	153	148	146	138	136	129	136	134	126	123
GPA	3.5	4.7	4.3	3.3	5.3	4.6	4.4	4.1	4.2	3.2	4.1

結果を表7に示した。1位が3班(157点)、2位が11班(153点)、3位が6班(148点)であった。グループの得点とグループメンバーの前期受講科目のGPA(平均値)との相関関係を見てみると、必ずしも成績の優れた学生で構成されたグループが高得点をマークしておらず、チームで働く力

を發揮して取り組んだチームが高い評価を得る結果となった。例えばGPAを基準にみても、最も高いグループは5班の5.3であるが得点は138点で順位は5位であった。その他の特徴としてGPA3.3～3.5の班が上位4位を占めていることである。

評価項目別の平均得点を表8に示した。得点の高い評価項目は「態度・意欲・関心」「チームワーク」「知識や理解」「創意・工夫」の3.6で、逆に最も低い評価項目は「持ち時間を有効に利用したか」3.1、「これまでの学修成果は取り入れられていたか」の3.2であった。特に発表時間の有効活用については、与えられた時間が10分であるにも関わらず7分未満で終了するチームがあり、今後は収集した資料を多角的に分析し専門的知識を幅広く活用することで、与えられた時間を有効に使い切るなど、発信力を高める取り組みができるように指導することが課題である。なお、学生もプレゼンテーションについて相互評価を行った。

評価内容は①発表態度②ストーリー性③声の大きさ④話すスピード⑤発表時間の有効活用の5項目とし、「◎(良い)」、「○(普通)」、「劣る(△)」の3段階で評価した。これは傾聴力、状況把握力を育成することを目的とするもので審査結果には反映されていない。『発信力』には、仕事において重要な「人前で話し、聞いている人に伝える力(プレゼンテーション力)」も含まれる。人前で話しフィードバックを受けることは、学生の自信や経験につながり、自分の課題と目標を見つける機会となる。プレゼンテーション力を高める最良の方法は人前で話す経験を積むことだが、学生時代に人前で話す機会は少ない。この発表会に参加すること自体が『発信力』を養う機会となり、学生にとって貴重な学び・経験の場になると考える。学生の課題として、プレゼンテーションにおけるノンバーバル(非言語)(※ノンバーバルスキル・・・「目線」「姿勢」等の非言語面でのスキル)のスキルを發揮できていないことが挙げられる。ノンバーバルのスキルについては授業内では説明で終え、実際に練習する機会を設けていなかった。実際にやってみる機会を設けないとなかなか実践にはつながらないため、今後の改善項目としたい。

社会人基礎力は、知識のようにインプットではなく、アウトプットできる(実際に行動できる)ことで、初めて価値がある。授業内にアウトプットの間を設けることは、社会人基礎力育成授業の形として非常に効果的だと感じた。振り返りを行う機会を与える点と発信力(プレゼンテーション力)を育成するという2つの点は他の授業にもつながり、非常に有意義であると考えられる。

表8 評価項目別の平均得点(満点:5点)

評価項目別 審査員の 平均得点	評価項目
3.5	1. 技能・表現(声の大きさ・スピード・表情・抑揚、間の取り方)
3.6	2. 態度・意欲・関心(立位姿勢、視線、服装、熱意、登壇・降壇)
3.6	3. チームワーク(協働作業)はあったか。
3.5	4. 内容は具体的で、なおかつストーリー性があったか。
3.2	5. これまでの学修成果は取り入れられていたか。
3.6	6. 知識や理解(科学的根拠に基づいて序論、本論、結論に構成されていたか。)
3.5	7. 技能・表現(イラストの場面に見合った適格な表現であったか。)
3.6	8. 創意・工夫(相手が理解しやすいような工夫や努力がされていたか。)
3.1	9. 持ち時間を有効に利用したか(指定時間10分～15分)。
3.5	10. 質疑応答の状況はどうであったか。

### 3. 気づきの会

#### (1) アンケートの結果からみる「気づきの会」に対する学生の評価

質問は5項目であるが結果を如実に反映する質問項目は次の3項目である。

【問1】面談は自分を振り返り、今後の学生生活や社会に出てから活かすことのできる取り組みでしたか。(はい、いいえ、どちらでもないで回答、その理由)

「はい」を選択したものは第1回及び第2回ともに100%であった。その理由として、自分を理解していただき明確なアドバイスがいただけた。自分の長所を気づかせてくださった。学生生活が不安でしたが頑張ろうと思った、などであった。その他に視野が広がった、クラスメイトの考えや目標が参考になったなど、率直な理由が多数であった。

【問2】面談で先生のアドバイスで心に残っていることは何ですか。(自由記述)

「今取り組んでいることが就職するときに生きてくる」、「失敗も成功も含めていろいろなことを体験すること」、「何でも完璧にこなそうとしなくても良い。次にできるようにすれば良い」など、一人ひとりの心に残るアドバイスであった。

【問3】気づきの会は後輩にも進めたいと思いますか。(すすめたい、すすめられない、どちらでもない)及びその理由

「はい」を選択したものは第1回及び第2回ともに100%であった。その理由として、「自分を振り返るいい機会だから」、「先生の話や言葉が胸にしみて頑張ろうと思えるから」「自分の将来について深く考えることができたから」など、好意的な回答であった。

課題として浮かび上がったことは、平成28年11月19日に開催された第2回気づきの会を10名の学生が欠席したことである。その理由は風邪やインフルエンザ等による体調不良が7名、明確な理由の無い者2名(連絡することを忘れた)、無断欠席が1名(頭痛がひどくて連絡できなかった)であった。こうした状況から今後、インフルエンザが流行する時期の開催を避けることも検討しなければならない。また、土曜日の開催であるためスクールバスの運行に利便性がないことから、長期的に気づきの会を開催するためには、バスダイヤの見直しも必然性を帯びてくるものと思われる。なお、欠席者10名については別途補講を実施したが、外部評価者との調整や時間割との関連があって、本来の気づきの会とは異なり、教員と助手のみで実施した。気づきの会は、学生を支援する組織を外部に設けることで、学生と社会の接点となり、社会に向けた意識が高まるメリットがあること、個々の学生が社会で働く人(外部支援組織)から直接助言・評価を受けるものであり、教員と学生にある上下関係的ではなく、組織における先輩と後輩的な斜めの関係でサポートできること、昨年度までの実績から社会で働く人と継続的に接点を持つことは、学生の社会へ向けた意識を高め、将来の目標設定につながる効果があること、等が確認された。

運営面では、事前に学生のレポートを送付したことで、面談担当者が前もって学生の特性を把握でき、また、2回の面談ともに担当する学生は同じとすることで、より効果的な取り組みとなった。例えば学生は自分の意見や考えを積極的に発言しやすいこと、一方の面談担当者も相互理解に立って学生と向き合うことができ、お互いに心理的に近い距離感を保つことでリラックス効果をもたらしたことなどである(写真2)。

#### 4. 外部面談者との意見交換会

平成28年度は11月19日(土)に実施した。カウンセラーからは、本学学生の考え方や特徴について貴重な発言があった(写真3)。本学の学生の行動特性や学生生活に関する考え方の傾向等について、①基礎的汎用能力(「社会人基礎力」)に関して言及する学生が目立ったこと、②栄養士の資格を得るという学びの目標をしっかりと持っていること、特に食物アレルギーに関する知識や

技術を身に付けたいとの明確な意志があったこと、③規律正しく行儀がよいこと、④素直にアドバイスを聞き入れ、賛同し自分の考え方や意見が発言できていること、等を評価する発言があった。しかし、個人の格差が大きく、おとなし過ぎる者や発言時の視線が相手に向いていない、身振り手振りによって伝える工夫に欠ける、との指摘もあった。キャリアカウンセラーという職責において、多くの学生との関わりの中で得た知見に基づく発言であり、能動的学修(アクティブラーニング)を中心とした本学の教育活動の成果であると同時に、発信力についてさらなる向上を目指して教育していく必要があると考えている。また、「気づきの会」が学生支援活動として位置づけられ経年的に充実してきていることは、本学の優れた特徴であることや今後も継続して協力する旨のコンセンサスが得られたこと、など好意的な意見もあった。

#### 5. 栄養士学外実習生の行動に関する評価・調査

平成 28 年度の栄養士学外実習は、平成 29 年 2 月から 3 月の期間に事業所、老人福祉施設、児童福祉施設、児童福祉施設、医療施設等、20 の実習施設において実施され 1 年生 44 名が終了した(写真 7)。



保育園

児童養護施設

特別養護老人ホーム

写真 7 学外実習の様子

#### (1) アンケートの結果

実習施設から評価された能力要素の結果と学生の自己評価を比較したが、その概要は次のとおりである(図 3~6)。

##### 1) 病院給食(図 3)

該当者は 1 施設 2 名である。7 つの能力要素の中で実習施設から、『模範的である』『やや優れている』の合計で 100%をマークしたものは規律性、計画力、課題発見力であった。次いで実行力の 83.4%、発信力及び傾聴力の 66.6%、主体性の 62.5%の順であった。逆に『やや劣る』と評価された要素は主体性の 37.5%、発信力と傾聴力の 33.3%、実行力の 16.7%であったが、『かなり劣る』と評価された能力要素はなかった。特に注目される点として、規律性について 75%が『模範的である』と高い評価を得たことであるが、『やや劣る』と評価された能力要素が主体性 37.5%、発信力と傾聴力の 33.3%と高い比率を示したことである。

##### 2) 老人福祉給食(図 4)

該当者は 5 施設 7 名である。評価項目である 7 つの能力要素の中で、『模範的である』または『やや優れている』と評価されたものは規律性 100%、実行力 95.2%、課題発見力と傾聴力 85.7%、計画力 78.6%、主体性 78.5%、発信力 71.5%であった。また、『やや劣る』は発信力 28.6%、主体性及び計画力 21.4%、課題発見力と傾聴力 14.3%、実行力 4.8%で、『かなり劣る』と評価されたものは無かった。一方、学生の自己評価では、発信力と規律性が 100%、次いで計画力 90.5%、

主体性90.4%、課題発見力85.8%、実行力と傾聴力71.4%であった。『やや劣る』は傾聴力28.6%、課題発見力14.3%、主体性と実行力がそれぞれ9.5%、計画力4.8%であった。

以上の結果から実習施設から高い評価を受けた能力要素は規律性、実行力、課題発見力、傾聴力であり、反対に低く評価されたものは発信力、主体性及び計画力であった。このように規律性については両者の評価が一致しているが、発信力及び計画力については乖離がみられる。特に発信力について85.7%の学生が「模範的である」との評価に対し、実習施設の評価は28.6%に留まっている。

### 3) 児童福祉給食(図5)

該当者は5施設10名である。評価項目である7つの能力要素の中で、『模範的である』『やや優れている』と評価されたものは実行力が100%規律性97.5%、次いで課題発見力と傾聴力が90.0%、主体性85.0%、発信力83.4%、計画力80.0%であった。『やや劣る』と評されたものは発信力が16.7%、主体性15.0%、課題発見力と傾聴力がそれぞれ10.0%、規律性2.5%であった。一方、学生の自己評価では『模範的である』『やや優れている』と自己評価したものは課題発見力と発信力が100%、計画力と規律性が96.7%、次いで主体性と実行力の80.0%、傾聴力70.0%の順であった。『やや劣る』『かなり劣る』と自己評価したものは傾聴力が30.0%、実行力20.0%、次いで主体性20.0%、計画力と規律性が3.3%の順であった。

以上の結果から、全体的には良好な成績であると言えるものの発信力、主体性に関して実習施設の評価は比較的低いことから、実習施設における発信力、主体性とはどのような行動を指すのか、どのように認識し行動すれば良いのか、正しく理解するための取り組みを強化する必要がある。

### 4) 事業所給食(図6)

該当者は9施設25名である。評価項目である7つの能力要素の中で、『模範的である』『やや優れている』と評価されたものは、実行力が97.3%、次いで計画力96.0%、主体性95.0%、傾聴力89.6%、発信力88.8%、規律性87.3%、課題発見力84.2%の順であった。『やや劣る』と評価されたものは課題発見力が最も高かった。『かなり劣る』と評価されたものは無かった。一方、学生の自己評価では『模範的である』『やや優れている』は発信力100%、規律性97.4%、次いで計画力と課題発見力の96.0%、主体性93.3%、実行力85.4%、傾聴力84.0%の順であった。『やや劣る』『かなり劣る』は傾聴力16.0%、実行力14.6%、主体性6.6%、計画力と課題発見力が4.0%であった。

以上の結果から、7つの能力要素のすべてにおいて実習施設の評価は良好であるが、課題発見力、規律性、発信力に対する評価が比較的低い。特に規律性については学生の自己評価では高いポイントであるのに対し、実習施設から『やや劣る』と評価されたものが12.7%であることから、今後の取り組みに向けた課題である。

#### (2) アンケート結果の総括(まとめ)

表9に実習分野である事業所、老人福祉、児童福祉、病院における評価結果を総括して、7つの能力要素別に示した。Aは模範的である、Bはやや優れている、Cはやや劣る、Dはかなり劣る、を示している。またTは実習施設の評価を、Sは学生の自己評価を示している。この表で実習施設の評価に焦点を当てると次のことが言える。

- ①実習施設からA評価を受けた能力要素のベスト3は規律性、傾聴力、実行力である。
- ②B評価のベスト3は計画力、実行力、課題発見力である。
- ③C評価は発信力、主体性、傾聴力、課題発見力、計画力、実行力、規律性の順である。

④D 評価の該当はない。

⑤平均値ではB 評価の比率が 48.2%と最も高く、次いでA 評価の 38.5%、C 評価の 13.3%の順である。

⑥A 評価とB 評価の合計は 86.7%であり、学生の社会人基礎力の発揮状況は全体としては好ましい結果である。

⑦個々の能力要素ごとに見ると発信力、主体性、傾聴力がC 評価であることから、今後の取り組みにおける重点課題と言える。

⑧学生の自己評価と実習施設の評価を対比してみると、乖離の大きいものとしてA では計画力と発信力、B では実行力と計画力、C では発信力と傾聴力である。

表9 社会人基礎力の7つの能力要素別評価  
(実習施設全体の評価と学生の自己評価の結果：単位%)

評価/ 能力要素	A		B		C		D	
	T	S	T	S	T	S	T	S
主体性	25.4	49.3	54.9	37.4	19.7	12.9	0.	0.3
実行力	37.9	53.5	56.0	26.6	6.1	8.7	0	11.2
計画力	32.5	76.4	56.2	19.4	11.3	3.0	0	1.2
課題発見力	31.5	48.7	56.0	46.7	12.5	4.6	0	0
発信力	30.7	80.4	46.7	19.6	22.6	0	0	0
傾聴力	44.4	11.1	38.6	57.8	17.0	31.1	0	0
規律性	67.0	51.2	29.2	47.3	3.8	1.5	0	0
平均値	38.5	52.9	48.2	36.4	13.3	8.9	0	1.8

A：模範的，B：やや優れている，C：やや劣る，D：かなり劣る，

T：実習施設の評価，S：学生の自己評価

各施設における学生の自己評価の結果について特徴を以下に示した。

病院給食では、計画力、課題発見力、発信力及び規律性の4つの要素については『模範的である』『やや優れている』の回答が100%であった。同様に主体性と実行力は88.3%、傾聴力は50%であった。『かなり劣る』と回答した者はすべての能力要素においていなかった。以上の結果から①規律性、計画力、課題発見力について実習施設の評価は高く、主体性、発信力、傾聴力については低いことが言える。

老人福祉施設では、高く評価を受けた能力要素は規律性、実行力、課題発見力、傾聴力の4つである。逆に発信力、主体性及び計画力は低く評価された。規律性については施設側と学生の自己評価と一致しているが、発信力及び計画力については乖離がみられる。

児童福祉施設実習では、発信力と主体性が、施設側の評価と学生の自己評価との間に隔たりがみられることから、無限の可能性開発講座(I・II)及び栄養士学外実習事前指導において、児童福祉施設では発信力、主体性をどのように発揮すればいいのか、どのように認識し行動すれば評価につながるのか、学生へのアプローチを強化しなければならない。

事業所給食では、7つの能力要素のすべてにおいて実習施設の評価は良好であるものの、課題

発見力、規律性、発信力に対する評価が比較的低い。特に規律性については学生の自己評価では高いポイントであるのに対し、実習施設から『やや劣る』と評価された学生も存在することから、今後の取り組みに向けた課題と言える。

学外実習では規律正しい行動を基本に「報告・連絡・相談」を励行し、積極的に取り組むことが肝要である。そして、到達目標に向けて献立作成や食材料の原価計算、その他給食の運営に関し、栄養士として必要な知識や技能を習得しなければならない。そのための基本的な行動として、その日の自己の行動を総合的に振り返り、できなかったことや理解不足の内容を確認し、予習・復習するなどして翌日の実習に備えることが重要である。そうした意味において学外実習は「社会人基礎力を発揮するための『絶好の実学の間』である」と言うことができる。

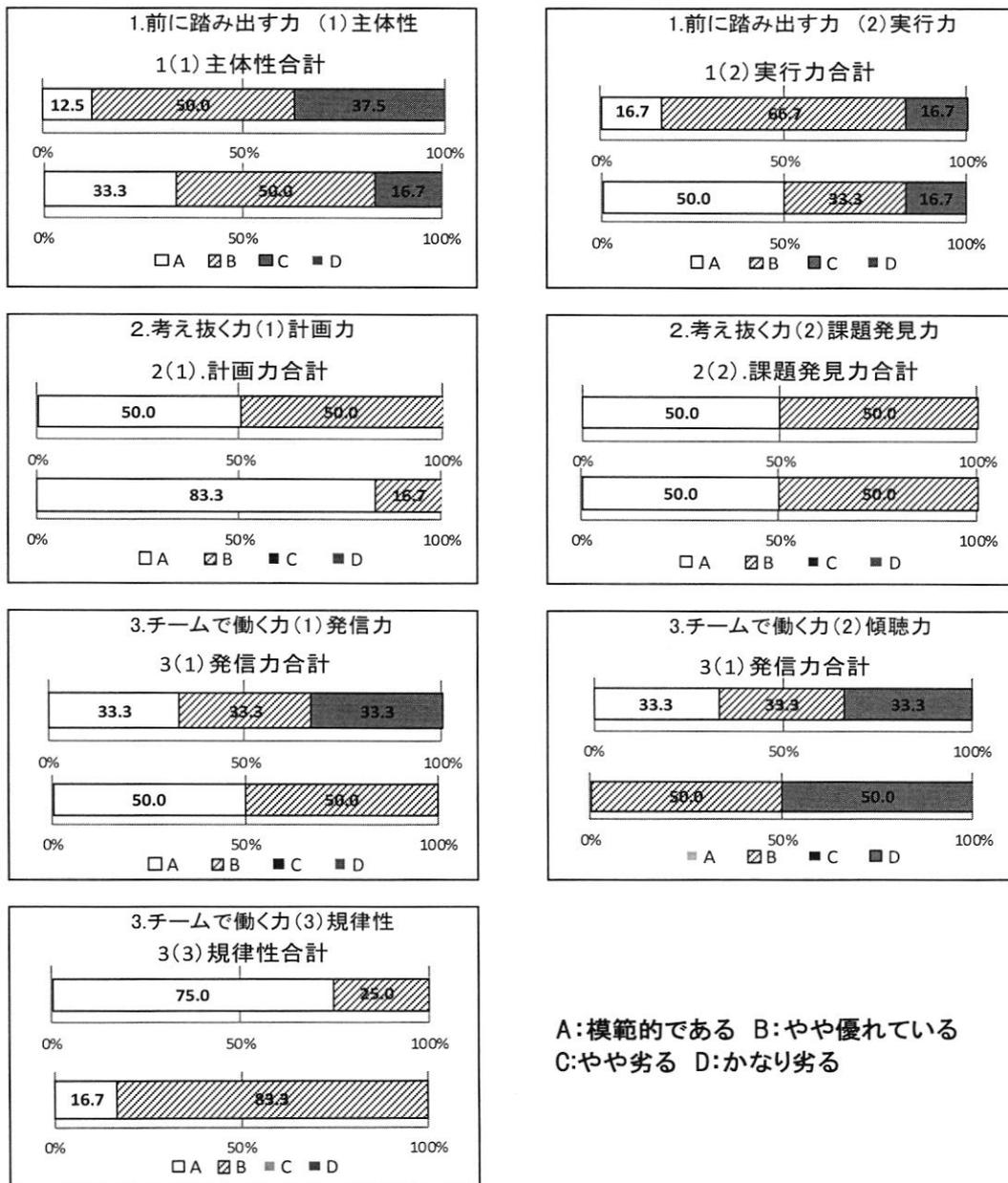


図3 平成28年度入学生を対象としたGP事業に係るアンケート結果(病院)  
(実習施設の評価と学生の自己評価との比較 上: 実習施設 下: 学生の自己評価)

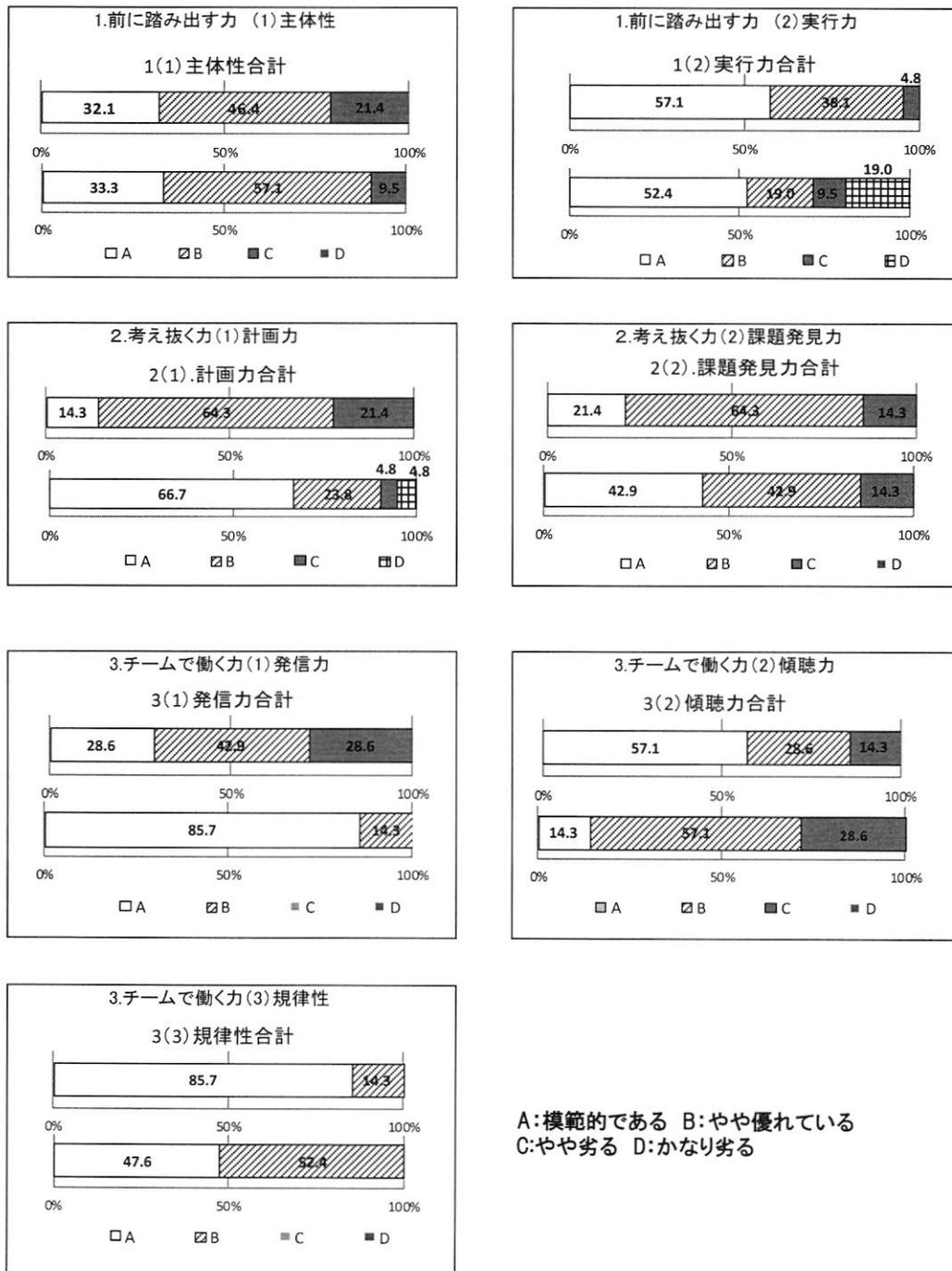


図4 平成28年度入学生を対象としたGP事業に係るアンケート結果(老人福祉施設)  
(実習施設の評価と学生の自己評価との比較 上:実習施設 下:学生の自己評価)

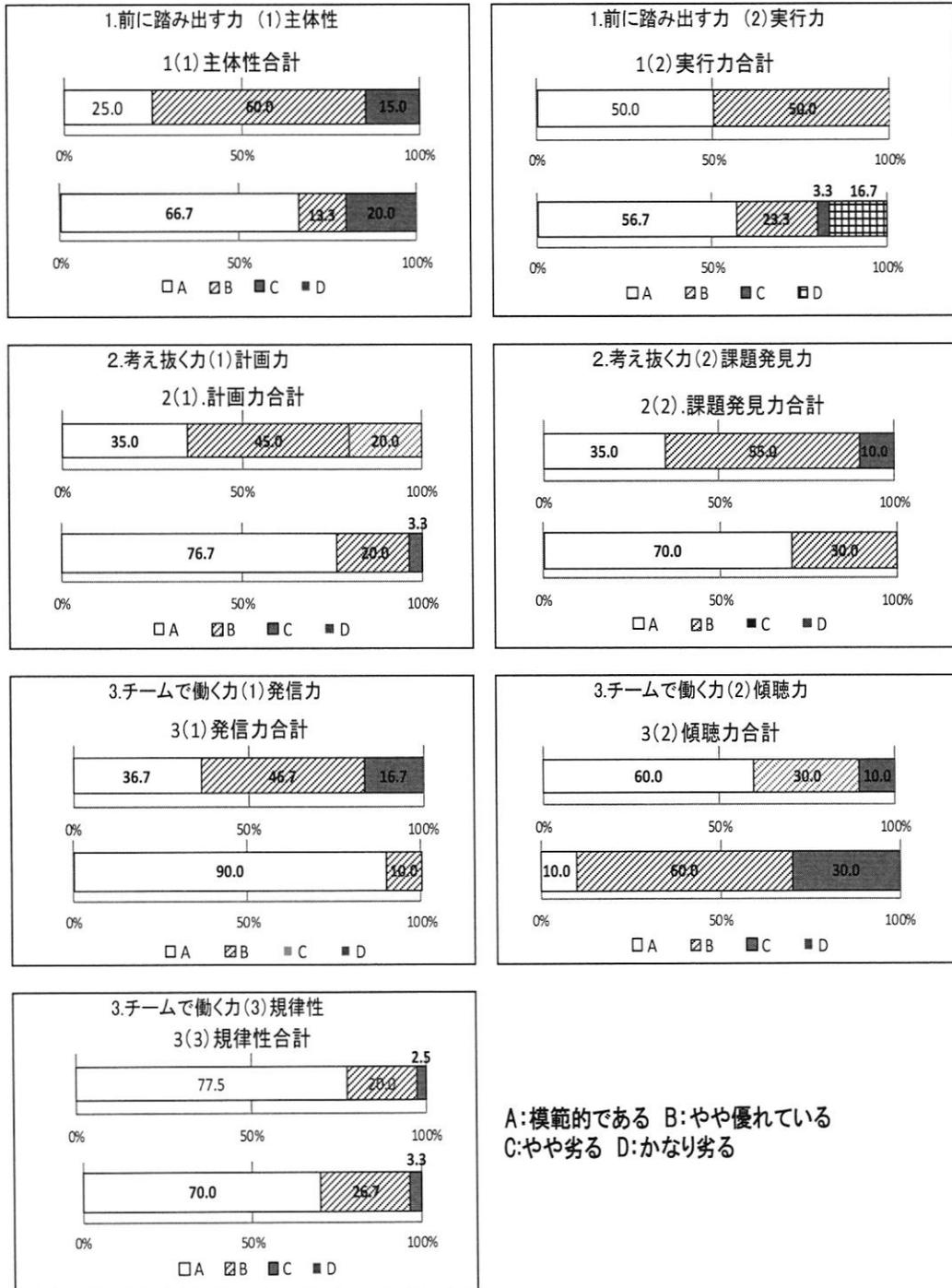


図5 平成28年度入学生を対象としたGP事業に係るアンケート結果(児童福祉施設)  
(実習施設の評価と学生の自己評価との比較 上: 実習施設 下: 学生の自己評価)

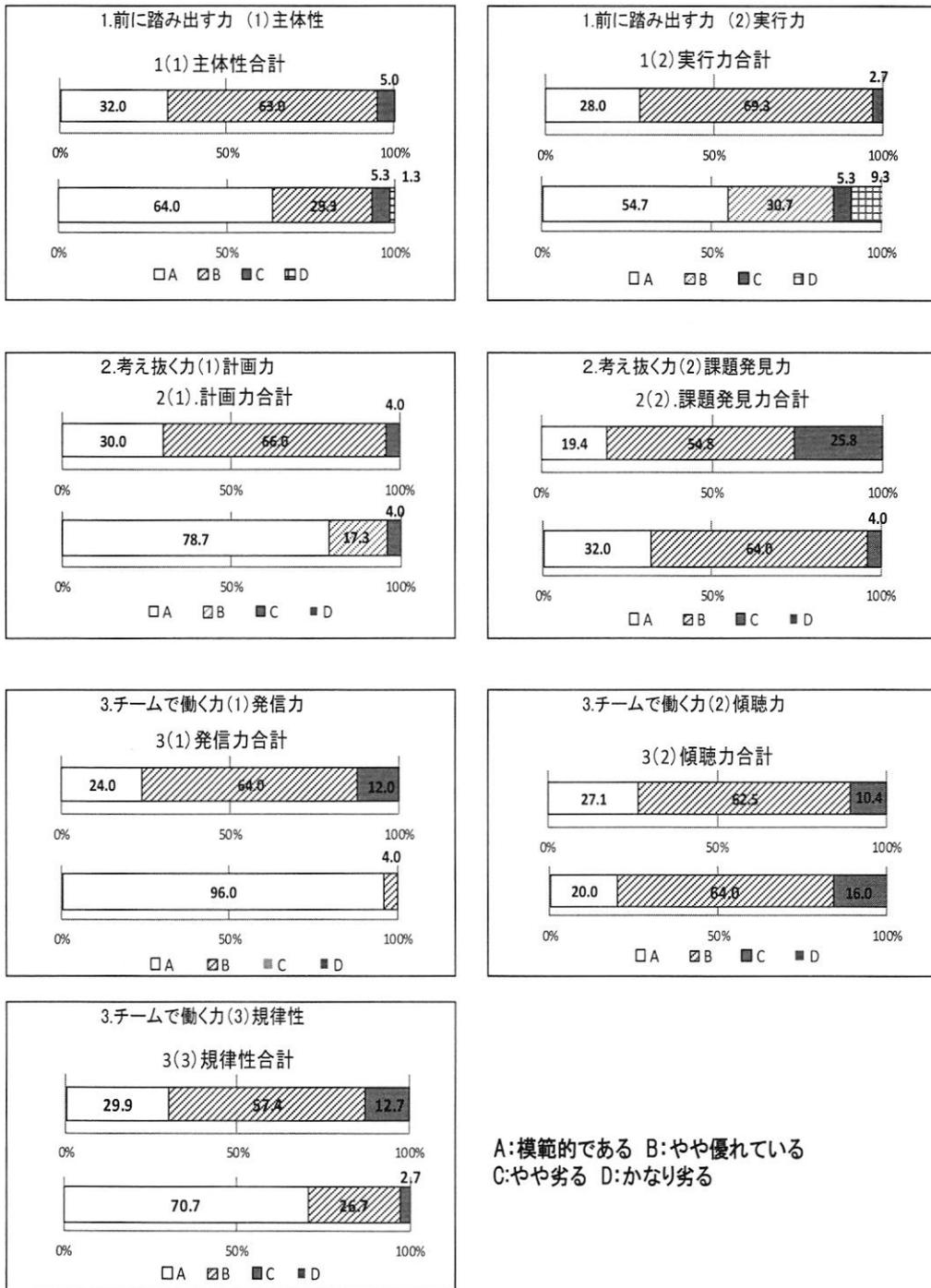


図6 平成28年度入学生を対象としたGP事業に係るアンケート結果(事業所)  
(実習施設の評価と学生の自己評価との比較 上: 実習施設 下: 学生の自己評価)

## Ⅶ. 考察

### 1. 無限の可能性開発講座(I・II)の取り組みについて

栄養士業務は多職種協働を基盤に執行される場合が多い。職責を十分に全うするための基本として良好な人間関係の樹立は必須である。職場では日々新たに生じる課題に対して有効な解決策を考えだし、協働で実行できる力が求められているのであり、ジェネリックスキルがなければミスマッチが起こり、それが「早期離職」につながっているとの見方もある。栄養士は、例えば病院においては、医師の処方箋に基づいて治療食を提供する仕事だけでなく、医療関係者とのチーム医療に取り組みなければならない。栄養学の知識や調理技術があるということだけでは成功しないのである。医療関係者は勿論、患者とのコミュニケーションを構築してこそ効果的な食事療法の提案等によって職責を果たすことが可能となる。そのためには「ザイアンスの単純接触効果(会わないと合わなくなる<sup>111)</sup>)」を参考とすることも重要である。社会人基礎力を発揮する機会エレベーターや廊下など至る所にあり、対人表情や態度を意味するボディランゲージなどの非言語が、コミュニケーションにおける影響のうち55%と最も大きな割合を占めるといわれている(メラビアン<sup>112)</sup>の法則<sup>113)</sup>)。筆者らはGP事業において、こうした理論や法則を踏まえながら、グループ活動を通して学生が多面的、多角的に社会人基礎力を身につけ、グループ活動の楽しさを感じながら到達目標にたどりつけるような仕組みを組み込んだ。20世紀後半に起きた情報技術革新、社会経済・産業的環境の国際化等のグローバル化の影響は、産業・経済の構造変化や雇用の多様化・流動化を引き起こし、学生の将来の捉え方にも変化をもたらしている。これに加え人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定ができない、自己肯定感をもてない、将来に希望を持つことができない、といった学生の増加なども指摘されている。このような激変する社会の中で、希望を持って自立的に自分の未来を切り拓いて生きていくためには、変化を恐れず、変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である(本学が推奨する「三つの挑戦」)。仲間と協力して学ぶことの楽しさを通して、さまざまなことに挑戦する勇気とその価値を共有させて、生涯にわたって学び続ける意欲を維持するための基盤づくりが我々教職員に突きつけられているのであり、この研究結果は学生の気質に沿った新しい教育モデルの創生に向けた取り組みであったと評価している。

### 2. GP事業全体を通して

多くの企業は、学生に「仕事を通じて学び成長し続ける力」を求めている。したがって学生の段階から「経験から学び成長する」力をつけておく必要がある。経験から学ぶとは、経験を「振り返り」、その中から自分なりの本質的な意味に「気づき」、そこから、「次の新たな一歩を踏み出す」というサイクルを自分で回せるようになることである。今回、平成28年度のGP事業として研究を進めた結果、次のような知見を得た。①グループワークにより能動的学修法をとおして、特定の職業を超えてあらゆる仕事で必要となるジェネリックスキルを育成できる。すなわち「知識活用力」や「課題解決力」などの考える力と、「コミュニケーション能力」や「自主性・自律性」などの生きる力が習得できる。②社会人基礎力育成に向けた取り組みにおいて、複数授業と連結して実施することが効果的であり、さらに「三つの挑戦」と接続させることで学生の最後までやり抜く力を維持することができる。③気づきの会での外部評価者の面談は、自己を振り返りやる気を起こさせることから、今後も積極的に実施する必要がある。また、教員が外部評価者との意見交換などを通して意志の疎通を図ることは学生支援に不可欠である。④発信力を育成するには、

大衆の面前で話す機会を多く体験させることが効果的である。以上の4つである。

## むすび

今回の研究は、学内における複数授業やオムニバス授業<sup>v)</sup>による自己主導型授業の展開、学外においては外部評価者及び学外実習施設による中断のない学修法の確立を目指したものである。学内での学びを学外でどのように活かすのかではなく、どのような授業をすれば自ら進んで社会人基礎力を発揮するようになるのか、について探求することが重要であることを経験した。しかし、単年度という短い期間での取り組みであるがゆえに、十分な成績を得るまでには至らなかったこと、また、学生の中には集団に適応できず協働作業が苦手な者や、潜在的に孤立を求める性格の者も存在することから、こうした学生を集団の中でどのように個人対応していくのか、どのように向き合えば良いのかなど、解決しなければならぬ難題の多さに気づかされたところであり、これらの課題に対応するためには継続した活動によって新たな知見を得ながら、栄養士養成施設における社会人基礎力育成教育モデルの構築に向けて、少しずつ経験を積んでいくことが重要であることを再認識させられた。

## 謝辞

本研究に当たりオムニバス授業への参加及び学生の評価並びにキャリアカウンセラー(外部評価者)との連絡調整等にご尽力くださいました、学校法人安城学園法人本部社会人基礎力推進室の伊藤公一氏に深く感謝します。また、本調査の実施に当たりご協力くださいました栄養士学外実習施設の関係者の皆様に深謝申し上げます。

本研究は平成28年度愛知学泉短期大学GP事業として実施したものです。

利益相反に関する開示:著者全員は本論文の研究内容について他者との利害関係を有しません。

## 参考文献

- 1) 永田敬、林一雅. アクティブラーニングのデザイン、東京大学出版会、2016
- 2) 平田オリザ. わかりあえないことから - コミュニケーションとは何か、講談社現代新書、2012
- 3) 愛知学泉短期大学. 無限の可能性への道 - 社会人基礎力を育む学泉ノート 2017

- 
- i) アメリカのチャールズ・ボンウェルとジム・エイソンによって1991年に理論化されて学習論になったといわれている。著書『アクティブラーニング - 教室の興奮を創る』1991
  - ii) ザヤブラガサラザンらが整理したアクティブラーニングでよく用いられる12の技法で2012年に提唱された。
  - iii) ザイアンスの単純接触効果:接する回数が増えるほど好意度や印象が高まる効果で、1968年にアメリカの心理学者ロバート・ザイアンスが発表した。
  - iv) メラビアン<sup>iv)</sup>の法則:人の第一印象は初めて会った時の3~5秒で決まり、その情報のほとんどを「視覚情報」から得ているという概念。アメリカの心理学者アルバート・メラビアンが1971年に提唱した。
  - v) オムニバスとは乗合馬車の意味で乗り合いバスの語源。複数の独立した作品を並べて一つの作品に仕上げた映画や演劇。そこから転じて複数の教員がそれぞれ専門分野の角度から一つの科目の授業を行うこと。